小・中学校　合同

平成２８年度

教育研究員研究報告書

図画工作・美術

東京都教育委員会

目次

Ⅰ　研究主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ　目指す児童・生徒像・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅲ　研究の仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅳ　研究の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅴ　研究方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅵ　研究の内容

　1　研究構想図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

　2　検証授業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

Ⅶ　成果と課題

　1　中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１

　2　小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２

　3　小中合同・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４

※平成 28 年 11 月末作成

【研究主題】

感性を高め、自ら価値を見いだせる児童・生徒の育成

Ⅰ　研究主題設定の理由

本研究は、小学校図画工作科と中学校美術科の合同部会として、義務教育段階での子供の発達や教育の連続性の中で培われる感性に重点を置いて進めてきた。感性を豊かにし、互いの考えや表現を交流・共有することで、児童・生徒が自らよさを見いだすことができることを目指すものである。

「小学校学習指導要領実施状況調査」（国立教育政策研究所教育課程研究センター　平成25年）からは、「表したいことを見付けて絵に表すこと」「我が国や諸外国の作品、暮らしの中の作品の表し方の変化、表現の意図や特徴などを捉えること」について、約60%の児童・生徒が苦手意識を感じていることが分かる。また、「図画工作の学習が好きか」という質問には肯定的回答が 80%であったのに対し、「図画工作を学習すれば、普段の生活や社会に出て役立つか」という質問に対して肯定的回答は約60%であった。さらに「教育課程企画特別部会　論点整理　補足資料」（文部科学省教育課程部会　平成28年）では、美術文化の理解を深める学習についての質問事項において約 50%が美術文化の継承と創造への関心が高まるような学習に至っていない等の課題が挙がっている。

このような現状から、「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）」（文部科学省教育課程部会　平成28年８月）では、感性や想像力を豊かに働かせて、思考・判断し表現したり鑑賞したりするなどの資質・能力を相互に関連させながら育成することや、生活を豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての実感的な理解を深め、生活や社会と豊かに関わる態度を育成すること等については、更なる充実が求められると述べられている。

研究主題を検討するにあたり、研究員が所属する各学校の図画工作・美術の学習における児童・生徒の現状や各地区の研究の様子から、「主体的に取り組む姿」「自分なりのよさを見付け、自信をもって表現する」ということや「感性を働かせながらつくりだす喜びを味わう」ということに課題があるということが明らかになった。　これらのことから、各学校段階において育成すべき資質・能力を明確にするとともに、その資質・能力の相互の関連や学習内容との関係性を明確にした主体的で創造的な学習活動を充実させること、生活や社会の中の造形や美術の働き、美術文化に関する学習活動の充実を図ることが重要であり、このような学びの充実を通して豊かな情操を養っていくことが必要であると確認した。

そこで、今回の研究では、自発的に課題を見付け解決していく児童・生徒、造形的な創造活動の中で自ら価値を見いだせる児童・生徒の育成を目標として主題を設定し、上記で述べてきた課題について迫りたいと考えた。

小学校学習指導要領解説図画工作編（平成20年８月）では、「感性」は、様々な対象や事象を心に感じ取る働きであるとともに、知性と一体化して創造性を育む重要なものであると記されており、児童の感覚や感じ方、表現の思いなど、自分の感性を十分に働かせることの重要性が述べられている。中学校学習指導要領解説美術編（平成20年７月）においても、「感

性」とは、様々な対象・事象からよさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力であり、知性と一体化して人間性や創造性の根幹をなすものとしている。また、感性は、創造活動において、対象を捉えたり判断やイメージをしたりするときの基になる力として働くとも記されている。

このようなことから、「感じる」体験を充実させ、感性を高めることで児童・生徒の見方や感じ方を広げたり深めたりし、自ら「よさ」に気付き、価値を見いだすことができるのではないかと考えた。そして、自ら価値を見いだす機会を多く経験させることができれば、自他の考え方や表現の面白さに気付き、多様な見方ができるのではないか。また、自ら価値を見いだしたことを自覚することで、授業で学んだことを基に、日常にあるものの美しさや面白さに意識が向くのではないか。身近なものの美しさや面白さ、不思議さに気付く視点が育つことで、我が国や諸外国の作品、暮らしの中の作品の表し方の変化、表現の意図や特徴などを捉えるとともに、それらのよさや更なる改善策を考え、自らつくり出す意欲にもつながるのではないかと考えた。

Ⅱ　目指す児童・生徒像

小中合同図画工作・美術部会として、共通する児童・生徒像を研究主題に込め、「感性を高め、自ら価値を見いだす児童・生徒の育成」とした。

「感性を高め」とは、「周りの物事から刺激を受け止める感覚的能力が高まること」「物事を心に深く感じ取る働きが高まること」と設定した。

「自ら価値を見いだせる」とは、「自分で物事に意義や理由をもたせたり、自分なりに大切なものとして認識したりできること」と設定した。

感性が高まる学びによって、自分なりの見方で身近なものの美しさ、面白さに気付くことができ、 自ら価値を見いだすことができるような児童・生徒を育成することにつながるのではないかと考えた。

Ⅲ　研究の仮説

体や心で感じる場面を設定したり、題材と生活を関連付ける働きかけをしたりすることで、感性が高まり、自分なりの見方・感じ方ができ、自ら価値を見いだす児童・生徒を育成できるのではないか。

図画工作・美術科の学習活動における児童・生徒の活動に、実際に手や体などの諸感覚を働かせ「感じる」ことや、自分の思いや気付きから始まる題材を設定する。また、自分なりに感じたことや考えたことなどを共有する機会を設定し、自他の考え方や表現のよさを客観的に捉えられるようにする。

また、題材と生活との関連を気付かせる働き掛けをすることによって、自らが気付いたよさが社会や生活の中とどのようにつながっているのかを意識させることで、自らが気付いたよさを再確認したり、価値付けたりすることができるようになるのではないかと仮定し、具体的な授業や手だてを検討、立案、実施、さらに実施後の検討を重ね明らかにすることを研究のねらいとする。

Ⅳ　研究の視点

実践研究において、小学校・中学校共通で（１）体や心で「感じる」場面設定、（２）題材と生活を関連付ける働き掛けをすることの２点を視点とし、それぞれにおいて手だてを考え、その効果を検証する。

（１）　体や心で感じる場面設定をする

手だてとして、「手や体などの諸感覚を働かせる題材設定の工夫」「自分の思いや気付きから始まる題材設定の工夫」の両方又はどちらかに重点を置き授業に取り入れる。

「青少年の体験活動に関する実態調査」（国立青年教育振興機構　平成 24 年）によると、児童・生徒のインターネットやゲームなどのメディア接触が増加傾向にあり、生活体験や自然体験の不足という課題が明らかにされている。

本研究では、目で見る、耳で聞く、手で触れるなど諸感覚を十分に働かせる体験と、自分の思いや気付きに着目させる時間を十分にとることで、感じる体験を授業で設定する。この経験を義務教育の９年間で積み重ねることで自分なりの見方・感じ方ができるようになるのではと考える。

（２）　題材と生活を関連付ける働き掛けをする

手だてとして、「題材と生活とのつながりを気付かせる工夫」「生活の中にあるよさや美しさに気付かせる工夫」の２点を授業に取り入れる。

現在の図画工作・美術の授業の課題として、授業で経験したことについての意識が授業内で完結してしまい、普段の日常生活と関連しているという意識にまで至らないことが挙げられている。

本来、日々選ぶ洋服の色合いや手触り、食材に合う器の色や形、盛り付け方、見る人の心に残るポスターのデザイン、美しく機能的である工芸品、好きなお菓子の食感、季節によって変わる葉の色など、生活のあらゆるところに造形的要素や美しさが存在している。図画工作・美術の授業において、日常生活のささいなことにも意識を向けさせることの積み重ねにより、自分なりの価値を見いだすことができるようになると考える。

授業では、生活の中から身近な材料を見付けたり、身近に感じられる作品や自然物などの鑑賞を行ったりするなど、教師の声掛けや導入の工夫、日常生活と授業との関連について検討していきたい。

○　自ら気付いた「よさ」を認識できる場面を設定する

本研究では、二つの視点と手だてにより検証を進めるが、児童・生徒の学びの過程において以下の内容を常に意識して授業を行う。

児童・生徒が素材や事象と関わる中で、気付くことや感じることは十人十色である。じっくりと個々で対象に向き合いながら感じること考えることを膨らませ、「よさ」に気付く時間を確保する。さらに、教師と子供、子供同士の対話を通して自他の考えを共有し、視野を広げたり思考を深めたりすることで、自ら気付いた「よ

さ」を客観的に捉え、再認識できる機会を設ける。

自ら気付いた「よさ」に価値を見いだすためには、気付いたことが他のものや場面でどのように用いられているのかと感じる場面の設定が必要になってくる。そこで、題材を通して学んだことを児童・生徒が振り返り、今までの経験と照らし合わせたり、実社会や実生活との関連を意識させたりすることができるような場面設定を行う。

Ⅴ　研究方法

1　基礎研究

先行研究の分析・検討

以下の参考文献から、本研究の裏付けとなる内容を調査・検討し、本研究の根拠とする。

（主な参考文献・資料）

ア　「特定の課題に関する調査　（美術）」
（国立教育政策研究所　平成 23 年）

イ　「小学校学習指導要領実施状況調査」　（国立教育政策研究所　平成 24 年）

ウ　「青少年の体験活動に関する実態調査」　（国立青年教育振興機構　平成 24 年）

エ　「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）」
（文部科学省教育課程部会　平成 28 年８月）

オ　「教育課程企画特別部会　論点整理　補足資料」
（文部科学省教育課程部会　平成 28 年）

2　実践研究

研究主題・仮説に基づいた題材設定、題材開発を行い、研究の視点に基づいた手だてを講じた指導方法で授業を実践する。また検証授業によって、指導方法が有効であったかを検証及び分析し、成果と課題を明らかにする。

また、小学校学習指導要領解説図画工作編（平成 20 年８月）では、指導に当たって〔共通事項〕が表現や鑑賞の領域や活動などの全体にかかわる事項であることを踏まえ、これまで行われてきた指導内容や方法を〔共通事項〕の視点で検討し、改善することが重要であると記されている。検証授業において該当する〔共通事項〕を明確にし、授業者が指導を具体化することができるよう、指導案では【評価規準に反映されている共通事項】という項目を立て、記載する。

Ⅵ　研究内容

1　研究構想図

教育研究員共通テーマ

「思考力・判断力・表現力等を高めるための授業改善」

図画工作・美術科の目標

【図画工作】

表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。

【 美 術 】

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。

図画工作・美術科で育成する資質や能力

【図画工作】造形への関心・意欲・態度

【 美　術 】美術への関心・意欲・態度

【 共　通 】発想や構想の能力
創造的な技能
鑑賞の能力

児童・生徒の実態 ≪調査結果≫

●表したいことを見付けて絵に表すことに課題がある。【H25　小学校学習指導要領実施状況調査（国立教育政策研究所）】

●図画工作・美術科を通してよさや美しさなどの価値を見いだすことが人生を豊かにするという意識が低い。

・生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての実感的な理解を深め、生活や社会と豊かにかかわる態度を育成すること等についてはさらなる充実が求められる。

【H28 次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）（文部科学省教育課程部会）】

・「図画工作の学習が好きだ」80.3%

・「図画工作を学習すれば普段の生活や社会に出て役立つ」60.0%

【H25　小学校学習指導要領実施状況調査(国立教育政策研究所)】

・「美術の学習が好きだ」74.7%

・「美術を学習すれば将来の生活や社会に出て役立つ」55.5%【H24 特定の課題に関する調査（美術）】

●メディア接触の増加や自然体験の減少により、経験・体験の不足、諸感覚を使って感じる力が生活の中で不足している。【H24　青少年の体験活動に関する実態調査(国立青年教育振興機構)】

児童・生徒の実態 ≪調査結果から分かること≫

・活動が決まるとすすんで取り組むことができるが、自ら表したいことを見付けて表現することに課題がある。

・図画工作・美術で学んだことを生かし、社会や日常の生活と豊かに関わろうとする意識が低い。

・経験や体験不足から、諸感覚を使って感じる力が乏しい。

研究主題

感性を高め、自ら価値を見いだせる児童・生徒の育成

「感性が高まる」とは

① 外界からの刺激を受け止める感覚的能力が高まるということ。

② 物事を心に深く感じ取る働きが高まるということ。

「自ら価値を見いだせる」とは

自分で物事に意義や理由をもたせたり、自分なりに大切なものとして認識したりできるということ。

研究の仮説

体や心で感じる場面を設定したり、題材と生活を関連付ける働き掛けをしたりすることで、感性が高まり、自分なりの見方・感じ方ができ、自ら価値を見いだす児童・生徒を育成できるであろう。

研究の視点①

・体で感じる場面の設定

・心で感じる場面の設定

手だて

・手や体などの諸感覚を働かせる題材設定の工夫

・自分の思い、気付きから始まる題材設定の工夫

研究の視点②

・題材と生活を関連付ける働き掛け

手だて

・題材と生活のつながりを気付かせる工夫

・生活の中にあるよさや美しさに気付かせる工夫

研究の方法

≪基礎研究≫

・H23　特定の課題に関する調査（美術）

・H24　小学校学習塩津要領実施状況調査（国立教育政策研究所）

・H24　青少年の体験活動に関する実態調査（国立青年教育振興機構）

・H28　次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）

・中教審 学校段階等別部会及び芸術(図画工作、美術科、芸術科、（美術、工芸））ワーキンググループ

≪実践研究≫

・小学校　検証授業　１回

・中学校　検証授業　１回

・本発表［提案授業］：小学校
（本発表前のプレ授業１回）

※授業前、授業後の児童・生徒の変容を数値化する

(1) 題材名「私が見つけた美しさ～屏風との出会い」

Ｂ鑑賞（１）ア　共通事項（１）ア　イ　　対象　第２学年

(2) 題材の目標

・観察から得た客観的事実や、他者との意見交流を通し、自らの考えや想像を発展させ、作品の世界観を深く味わう。

・屏風作品から自然や空間を生かした日本の美意識や住文化を感じ取り、生活と美術の結び付きや美術文化を継承し想像することの意義を理解する。

(3) 題材の評価規準

ア　美術への関心・意欲・態度	エ　鑑賞の能力
① 様々な姿勢や角度から作品を鑑賞し、主体的に作品のよさを感じとっている。 ② 環境の中に見られる身近な造形的美しさなどに関心をもち、主体的に生活を美しく豊かにする美術の働きについて理解しようとしている。	① 姿勢による視点の変化、屏風のもつ空間性、光の効果などを踏まえて、作者の意図や作品の世界観を感じ取ろうとする。 ② 屏風の間仕切りや遮蔽などの機能性と装飾性が空間を演出していることへの気付きを通し、美術と生活の結び付きを理解する。

【評価規準に反映されている共通事項】

・第２学年及び第３学年

ア　形や色彩、材料，光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること。

イ　形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージを捉えること。

４　研究主題との関連

	視点	手だて	教師の準備、働きかけ	本時の生徒の具体的な活動
①	体で感じる場面設定	諸感覚を働かせる題材設定の工夫	実物大の屏風作品を広い部屋に配置し、屏風本来の装飾性と空間演出の効果を体感できるようにする。 作品の周囲を自由に動ける配置と光の影響も配慮する。	作品の周囲を自由に動き、いろいろな姿勢で鑑賞することでイメージをふくらませる。自然光や空間など環境設定を含めて作品の世界観を味わう。
	心で感じる場面設定	自分の思い、気付きから始まる題材設定の工夫	作品の第一印象を大切にし、グループ分けは類似意見と違う観点の生徒で行えるように組み、視野を広げ、議論が発展するように設定する。	第一印象で自分が関心を抱いたテーマからグループ分けをし、話合いを深めていく。
②	題材と生活を関連付ける働きかけ	題材と生活のつながりを気付かせる工夫 生活の中にあるよさや美しさに気付かせる工夫	屏風の配置を工夫し、物を隠したり空間を仕切ったりする効果に気付かせる。そこから、身近なカーテンやスクリーン、間仕切りなど、現代の生活の中でも共通する空間を豊かに演出する考え方に気付かせる。	屏風の実物を通して、装飾性に加えて間仕切りや遮蔽の機能が生活を豊かにしていることを理解する。

※上記について、授業前後の変遷を検証する為の授業アンケートを実施。

(5) 指導観

① 題材観

本題材は、屏風を通して、絵画と空間が融合することで生まれる造形の魅力に着目した鑑賞の活動である。

現行の中学校学習指導要領美術の改訂趣旨の一つに、「感じ取る力や思考する力を一層豊かに育てるために、自分の思いを語り合ったり、自分の価値意識をもって批評し合ったりする」という鑑賞の指導が挙げられている。グループワークでは、他者の意見から新しい視点が加わることにより視野が広がり、自分なりの見方や考えをもつ効果が期待できる。また、屏風作品は固定された位置から見るだけではなく、作品の周囲を歩く、座る、など体全体を動かすことにより、様々な視点からの鑑賞が可能になる。これは、感じ取る力を一層豊かにすることにもつながる。さらには、来たるべき修学旅行に向けて、伝統的な美術や文化に対する積極的な鑑賞姿勢を育むきっかけにもしていきたい。

② 教材観

今回は実物大のレプリカ作品を用いることで、屏風本来の空間性を体験できるようにする。屏風の前に座ったり周りを歩いたりすることでもたらされる印象の変化、折り曲げることにより生じる空間を取り込んだスケール感など、視覚だけではなく諸感覚を働かせることにより、感性を刺激する効果が期待できる。尾形光琳による「紅白梅図屏風」は描かれている要素が比較的少ないことや屏風が現代の生活に活用されている機会が少ないことから生徒にとっては関心を寄せにくく、生活と結び付けて考えることが難しい場合もある。しかし、一度興味をもって向き合うと、研ぎ澄まされた表現の美しさ、ダイナミックな空間性、左右・上下・紅白・金と黒（銀さび）・老若・具象と抽象など、繰り返される対比からもたらされる作者の思いなどが大変魅力的な作品であることに気付く。大きな画面からは、色彩や造形要素、更には資料写真では気付きにくいディティールなど造形要素の読み取りにも迫りやすくなる。背景の金箔の上に薄く墨がぼかしてある刷毛跡に気付いたとき、派手さだけに留まらない金の効果に出合えるであろう。垂らし込みや、樹の表面に描かれている苔の細かさなども見所である。また、形態は異なるが、現代の生活空間では、カーテンやブラインドといった窓掛けやスクリーン、パーティション等、機能と審美性を兼ね備えた仕切りが活躍していることと屏風（伝統工芸）との結び付きについて気付かせることができると考える。

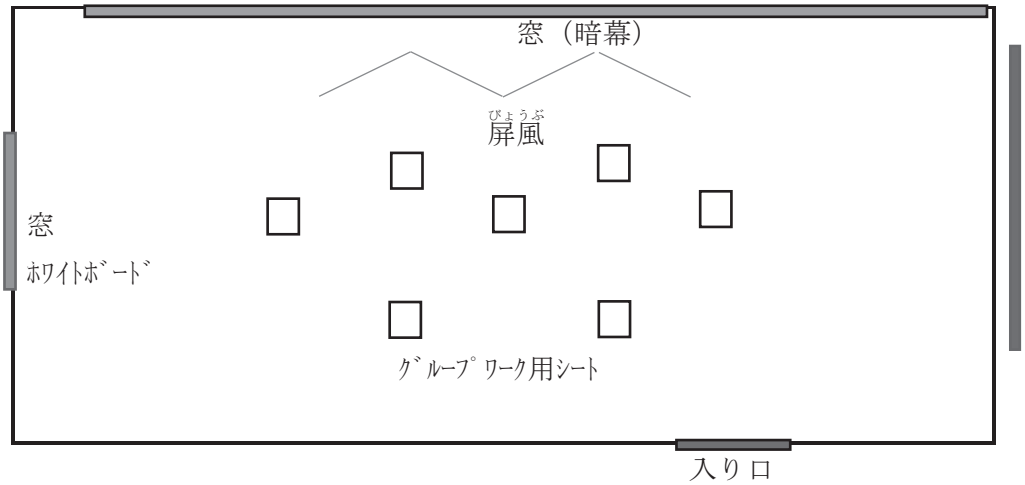
③ 教材教具

生徒 …筆記用具（赤ペン）、教科書

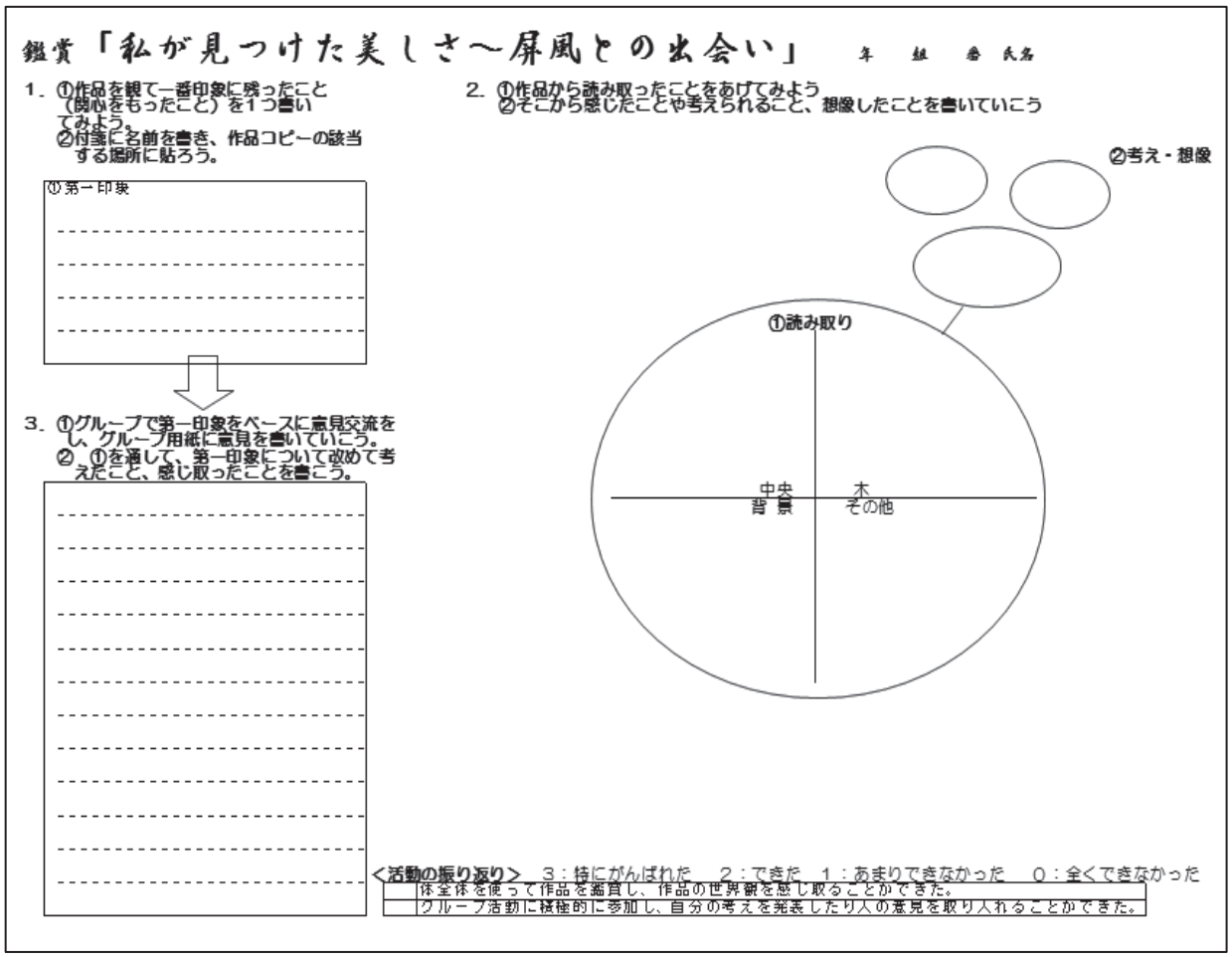
授業者…教科書、ワークシート、グループ用ワークシート、付箋紙、マジック（６色程度）
掲示用作品拡大コピー、実物大レプリカ作品（美術館から貸り受け）

環境 …多目的室を使用し、屏風の周りを自由に動き回ることができ、作品近くでグループワークができる空間を確保

＜会場図＞



④　ワークシート



鑑賞「私が見つけた美しさ～屏風との出会い」　年　組　番　氏名

1．①作品を観て一番印象に残ったこと（関心をもったこと）を1つ書いてみよう。
②付箋に名前を書き、作品コピーの該当する場所に貼ろう。

①第一印象

2．①作品から読み取ったことをあげてみよう
②そこから感じたことや考えられること、想像したことを書いていこう

②考え・想像

①読み取り

中央　木
背景　その他

3．①グループで第一印象をベースに意見交流をし、グループ用紙に意見を書いていこう。
②　①を通して、第一印象について改めて考えたこと、感じ取ったことを書こう。

＜活動の振り返り＞　3：特にがんばれた　2：できた　1：あまりできなかった　0：全くできなかった

	体全体を使って作品を鑑賞し、作品の世界観を感じ取ることができた。
	グループ活動に積極的に参加し、自分の考えを発表したり人の意見を取り入れることができた。

(6) 指導計画（２時間扱い）　※めあて…□、研究の視点との関連…

時	○主な学習内容 ・学習活動	◆指導上の留意点 ◇教師の支援	学習活動に即した【評価規準】（評価方法）
第1時（本時）	実物大レプリカを鑑賞し、作品世界を味わおう。		
	○屏風（びょうぶ）の周りを自由に移動し、いろいろな角度、姿勢で鑑賞し、造形的な良さを感じ取る。	◆第一印象で感じた部分についてその根拠となる表現や効果を見付けられるようにする。	【アー①】（観察）
	○じっくりと作品の鑑賞（事実の読み取り）をし、気付いたこと、見付けたことをワークシートに書く。	◆教科書資料では確認できない細部表現、効果に着目させる。 ◇立体的に置かれることでもたらされる絵の印象に着目させる。	【エー①】（観察、ワークシート）
	○グループに分かれてテーマに沿って話し合う。 ○自分が屏風から読み取った事実や感じたことをグループ内で発表する。	◆木（右、左）、中央、背景、その他など大まかにグループ分けし、テーマ中心に意見交換させる。（４～５人編成） ※事前に第一印象を基にグループ分けをしておく。	【アー①】（観察、ワークシート）
	① 関心をもった内容やそれぞれの読み取りを発表し合い、他者の意見も取り入れながら、テーマについて考えを深めて行く。	＜テーマ例＞ ・中央の川 ・背景の金色 ・左の木　　等 ◇全員が発表できるように声を掛けるとともに、有効な意見は全体に紹介する。	
	② 話合いの過程をグループ用ワークシートに記入する。	◆意見や感じたことを書かせることで話合いの変遷の記録が残るようにさせる。イラストを交えてもよいことを伝える。 ◇全員に筆記用具を持たせ、まとめを気にせずに気付いたことや感じたことを書かせる。	
	③ 次回の説明をする。	◆本時の鑑賞や話合いの内容を基に、発表内容の確認や分担をさせる。	

第2時	各グループで話し合った内容を発表し、意見を交換しよう。		
	○グループごとに発表する。 ・グループごとに意見を振り返り、テーマ発表に必要な情報を整理し発表する。 ・発表での他者の意見も取り入れながら、屏風作品について鑑賞カードのまとめを記入する。	◆第一印象からどのように考えが発展したかを押さえさせる。 ◇グループ用ワークシートを活用させる。 ◆自分の考えが鑑賞での気付きや他者の意見を取り入れてどのように変遷し、新しい価値観が形成されていったかを振り返らせる。 例）・グループで話し合ったとき ・作品を見て気付きを得たとき ・自分と同じ意見の人を確認したとき ・他者の意見を聞いたとき ◇振り返りアンケートを用意し、自分の考え方に自信を持てたり、大きく変化したりした場面を振り返りやすくする。	【アー②】 （発表）
	○屏風の機能性や装飾性と生活との関わりについて、考える。	○屏風の機能と装飾性が生活空間を美しく演出していることに気付かせ、身近な生活の中での生かし方や、修学旅行に向けての興味を喚起させる。 ◇パーティションや小物を使い、今昔の屏風の間仕切り機能や空間装飾の効果を実感させたり、光の加減で屏風がどのように見えるのかを体感させ、空間美を実感させたりする。	【エー②】 （発表、ワークシート）

○授業の様子

【実物大レプリカの周りで自由に鑑賞】

【ワークシートを囲んで自由に意見を交わす】

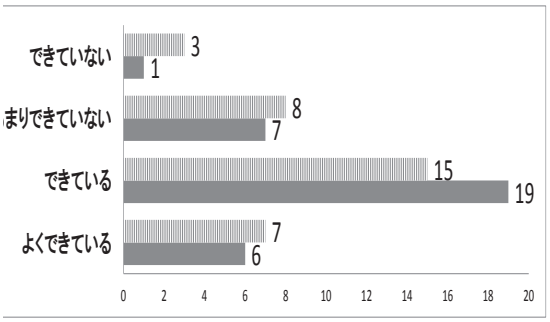
（７） 成果と課題

① 検証授業学習シートの結果比較（34 名中１名欠席）

以下の設問により授業を行う前と後で、どのような結果になったかを比較した。

【破線：授業前　棒線：授業後】

アー① 作品のアイデアを考えたり、つくったりする時に自信をもって活動できていますか。



○評価が上がった生徒　11 人

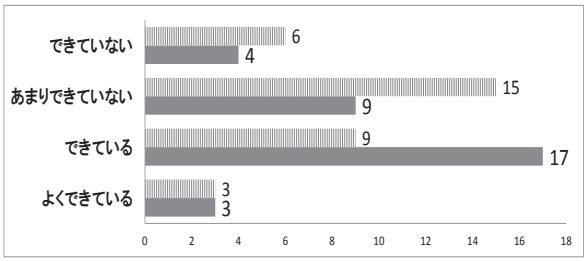
●評価が下がった生徒　５人

○リアルに描かなくてもその場の美しさを表現できることを知ったから。
○いろいろな角度から考えようと思ったから。
○色の使い方や絵の具の新しい塗り方がわかったから。
○一人一人いろいろな意見が出て、美術は感じ方がそれぞれ違うことを知って自分の意見に自信が付いた。
●よさが分かっても、どのように取り入れればよいか分からない。
●あまりアイデアが浮かばず、形にできない。

鑑賞した際に感じたことや考えたことについてグループで交流する場面を設定した。興味をもった内容や日頃の発言の様子を考慮した構成にしたため、多くの生徒が自らの考えに自信をもつことができた。一部の生徒には、更に個別の声掛けが必要だと分かった。

自ら価値を見いだすことが表現・鑑賞時にどの程度できているか

アー② 作品鑑賞などで自分の意見を発表（発言）していますか。



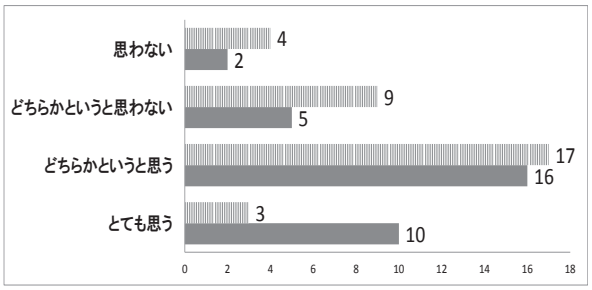
○評価が上がった生徒　13 人

●評価が下がった生徒　３人

○実際のものなら自分の考えが言えるから。
○いろいろな意見があっていいと分かったから。
○しっかり自分の意見をもつようにしたいから。
○感じたことや思ったことが言えたから。
●文章が苦手だから。
●自分が言うことが正解か自信がないから。

鑑賞の際に、グループにおいても、全体発表においても、個々が感じたことを大切に受け止める雰囲気をつくることやグループ内で意見を交流する機会を定期的に設けることで、全体の前では発言が難しい生徒も自分の思いを伝えることができていた。文章表現や自分の気持ちを表現することが苦手な生徒には、担任と情報共有をしながら今後も手だてを考える必要がある。

イ　日常の生活と美術が関わっている（役に立っている）と思いますか。



○評価が上がった生徒　11 人

●評価が下がった生徒　２人

○いろいろな場所に様々な色や形が使われていると改めて思ったから。
○気持ちが和らぐ色などが自分の部屋にあるから。
○建物、家具、服などに関わっているから。
○仕事に関係するかもしれないから。
●絵を描かないし美術館に行かないから。
●あまりそう感じるものが無いから。

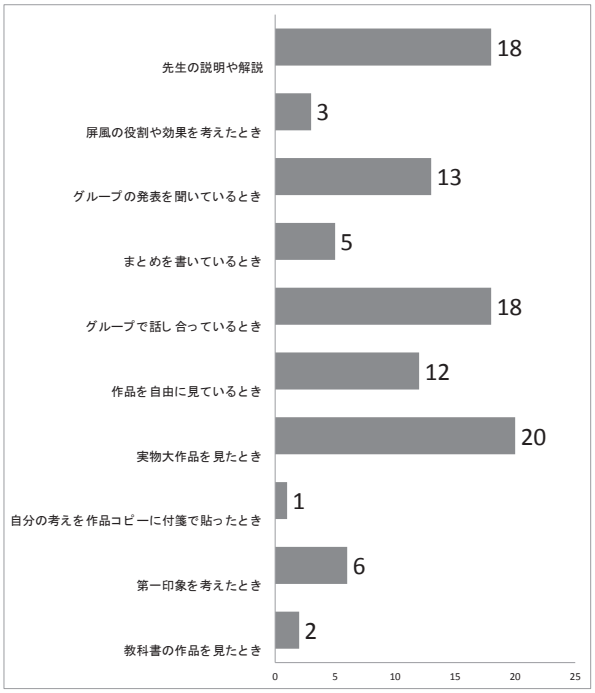
授業を経て、「思わない」「どちらかというと思わない」から「どちらかというと思う」「とても思う」へと大幅に変化した。●の感想をもった生徒に個別に話を聞くと、絵画・美術館といった「作品」の印象が強かったが、美術で学んだ視点を改めて話すと、生活とのつながりを意識できていた。

日常生活との関わり

全体的に授業前と比べて評価が上がった生徒が多く、実物大のレプリカが生徒の興味を引き付けていたことがよく分かる。また、グループでの意見交流をすることで自他の考えを共有したり、比べたりし、自ら気付いたよさを再確認したり深めたりできていた。実際に屏風を用いて授業をすることで、生活とのつながりも意識できる生徒が多かった。

一方で、少数ではあるが、興味をもって作品を鑑賞しているが、言葉にして伝えたり、書いたりすることが苦手なため、評価が伸びない生徒や自分のアイデアや考えに自信をもったり、取り入れたりすることをどのようにすべきか悩んでいる生徒も見られた。今後、個別の声掛けの工夫が必要であると感じた。

ウ　今回の授業で作品鑑賞が深まるきっかけとなった場面、活動は何でしたか。（複数回答）



◆今回の実物大レプリカでの鑑賞は、教科書や資料集での鑑賞と比べて見方がどのように違いましたか？【生徒記述意見より】

・大きさや、角度によって変わる色など。
・実物で見ると教科書では分からないような細かい部分も見ることができた。
・木に付いている白い小さな点が何かわからなかったが、実物大の作品を見ることでよく分かった。
・いろいろな角度から見ることができた。
・迫力が違った。
・大きな絵を遠くから全体を見たり近くからじっくり見たりすることができた。

②　検証授業の成果と課題　　○成果　　●課題

体や心で感じる場面の設定	○実物に近いレプリカ作品を置くことで発見や気付きが増え、興味関心の乏しい生徒が意欲的に活動に参加できていた。効果的であった。 ・友人、グループとの交流に刺激を受けて、作品に対する興味や見方考え方を深めていくことができた。 ・グループワークで書き込んだシートが、視覚的な記録になり、作品とシートを見比べながら自分の考えを整理していく場面が見られた。 ●近くで見る生徒が多いと、遠くから全体を見たりすることが難しかったため、グループ毎に鑑賞場所や時間を与え、いろいろな場所から見ることなどの見やすさの保証があるとよかった。
生活とのつながり	○生活の中のあらゆる場面に色や形があり、それが美術と結び付いていることを意識する生徒が増えた。 ○屏風（びょうぶ）を使用していた時代の美意識に触れ、身の回りのものや空間の美しさについて考える生徒が増えた。
価値を見いだす	○作品の豊かな表現や、クラスメイトの自由な作品の見方、感じ方を通して、自らも自由に考え表現することに目覚める姿が見られた。 ○第一印象を書いた個々のプリントから、同じ印象を持つ生徒同士の班にした。自分の考えと同じ人がいることで、自分の意見に自信がもてた。 ●作品や作者情報を提示するタイミングを授業の最初か最後にする。 最初に提示すると鑑賞を深めることができるよさがあり、最後に提示することで先入観が無くなり、自由に発想を展開できるよさもある。何をどのように考えさせたいかによる。 ●生徒の発言の時間をもっと増やした方がよかった。

３　検証授業　小学校

(1) 題材名　「音を感じて表そう」Ａ表現（２）　Ｂ鑑賞（１）　対象　第５学年

(2) 題材の目標

・身近な物から出る音や楽器の音に興味をもち、すすんで鳴らしたりいろいろな響かせ方を試したりしながら音のイメージを表すことを楽しんでいる。

・身近な物から出る音や楽器の音の響きや音色、長短、強弱などの特徴から発想し、用具を工夫して形や色で平面に表している。

・実際に音を聞いて想像したり作品と比べたりしながら自他の音のイメージの表し方のよさや面白さ、表現の意図などを感じ取っている。

(3) 題材の評価規準

ア　造形への関心・意欲・態度	イ　発想や構想の能力	ウ　創造的な技能	エ　鑑賞の能力
①　身近な物から出る音や楽器の音に興味をもち、すすんでいろいろな音を鳴らすなどしながら自分のイメージで表そうとしている。 ②　音のイメージを膨らませ、形や色を組み合わせて表すことを楽しもうとしている。	①　身近な物から出る音や楽器の音の響きや音色、長短、強弱などの特徴から用具での表し方を試したり新たな方法を考えたりしながら自分の表したいイメージを膨らませている。	①　身近な物から出る音や楽器の音のイメージをもとに、既習事項の中から表現方法を選び、試し、見付けながら形や色の表し方を工夫している。	①　造形的な特徴や実際の音を聞いて、自他の作品と比べたりしながら、表し方のよさや面白さ、表現の意図などを感じ取っている。

【評価規準に反映されている共通事項】

・第５学年及び第６学年

ア　自分の感覚や活動を通して、形や色、動きや奥行きなどの造形的な特徴を捉えること。

イ　形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。

（４）　研究主題との関連

視点		手だて	教師の準備、働きかけ	本時の児童の具体的な活動
①	体で感じる場面設定	諸感覚を働かせる場面設定の工夫	・実際に音を出して、小さな紙に表す活動を取り入れる。表し方の技法を紹介する。 ・いろいろな音に触れながら表したい音を決め、何度も鳴らして確かめ、表現方法を試したりする場面を設定する。	・導入では教師の出したいくつかの音を聞き、小さな紙に表す活動をし、イメージをふくらませる。 ・いろいろな音を鳴らしたり聞いたりしながら表現方法を試す。
	心で感じる場面設定	自分の思い、気付きから始まる題材設定の工夫	・音の長短、響き、音色、強弱、大きさ、重なりなどの自分が受けたイメージについてキーワードを示して考えさせる。 ・自分で感じた音のイメージを色と形の楽譜のように表すよう伝え、鑑賞会では作品を見ながら実際に演奏させ、音と作品両方から受ける印象について交流する場を設定する。	・自分が音から感じるイメージをどのように表すか、既習事項の中で選んだり試したりして確認する。 ・友達の選んだ音を聞いたり表したりする活動や表した作品の楽譜から演奏することでお互いの感じ方や表し方を共感したり伝えあったりする。

②	題材と生活を関連付ける働き掛け	題材と生活のつながりを気付かせる工夫 生活の中にあるよさや美しさに気付かせる工夫	・学校行事で音楽会を控えているため、学校生活で歌ったり演奏したりする機会が増える時期に、同じ楽器でも鳴らし方の変化でイメージが広がり、いろいろな形や色で表すことができることを伝える。 ・楽器の音を表すことで「楽譜」と伝えるが、まとめでは、他にも自然が生み出す音や生活音、動作音などを表現することにも興味をもたせる。	・身近にある音の鳴る物や楽器から出る音を基にした色と形の楽譜であることを確認する。 ・いろいろな楽器の音に触れ、表現する活動を振り返りながら他の生活音や自然音についても表せそうだということに興味をもつ。

※諸感覚を働かせ、自分で楽器や音の鳴る物から出る音をどのように表すかを考えさせ、色と形の楽譜のように表す。既習事項を生かして様々な表現と音のイメージをつなげ、画用紙に描く活動を設定する。

※上記について授業前後の変容を検証するためのアンケートを実施する。

(5) 指導観

① 題材観

本題材は、身近な物から出る音や楽器の音に着目し、イメージを広げ描画材や用具を組み合わせて紙に色と形の楽譜のように表すＡ表現（２）と、実際に表した楽譜での演奏を聞きながら作品をお互いに鑑賞するＢ鑑賞（１）の活動である。

学校行事で音楽会を控えた時期であり､音や楽器に触れる機会が多い状況であることから、いろいろな楽器や音を基にイメージを色や形で楽譜のように表す題材への興味や関心が高まるのではないかと考えた。

また、いろいろな音のイメージを、どのような用具や表現方法を用いれば自分なりに色や形で表すことができるのか、用具を選んだり何度も試したりできる場を設定することで高学年として既習事項を生かす力を伸ばしたい。そして、楽器の音を確かめながら、音という形がないものを表す抽象的な表現をする活動を通して、自らのイメージを表す体験をし、新しい価値や自分なりの価値を見いだし、今後の幅広い表現へつながることを期待する。

「平成 24 年　小学校学習指導要領実施状況調査」より、「図画工作・美術の学習が普段の生活や社会に出て役立つ」という回答は 60％であった。このことから、まとめでは身の回りの生活で聞こえる自然音、動作音なども表すことはできるのではないか、と興味を向けさせ図画工作の学習が普段の生活にもつながっていることを意識させたい。

② 教材観

本題材で表す音として、楽器はリコーダー、鈴、トライアングル、カスタネットなど身近な楽器を用意し、音色の違いや強弱、長短、響かせ方の違いについて気付かせ、何度も音を確かめ、自分の表したい音を選択できるように設定した。そして、描画材は、既習事項である絵の具と水の量の工夫、ぼかし、にじみ、かすれの技法や、歯ブラシと網を使ったスパッタリング、クレパス、色鉛筆、カラーペン、チョークなどを用いる。また、用具も筆のほか

に刷毛、わりばし、ストロー、スポンジ、ビー玉、お盆などを用意した。以上の場の設定から、児童が様々な音に触れ、表したい音を選択し、自分のイメージに合わせて用具や表し方を選んだり、組み合わせたりするなど工夫して表すことができるのではないかと期待する。

また、第２次では表した音を簡単に紹介したり、実際に音を出したりしながら、友達と交流する活動を取り入れ、その後の活動で更に自分の作品へ生かせるようにする。最後の鑑賞会では自分の“色と形の楽譜”を使って演奏しながら作品を鑑賞し合う活動を設定した。この鑑賞活動を通して、同じ音や楽器でも感じ方やイメージの表し方が違うこと、共感できることに気付くのではないか。そして、実際の演奏と作品を比較しながら鑑賞することで新たに価値を見いだしたり､再確認したりしながら感性が高まっていくのではないかと期待する。

③　教材・用具

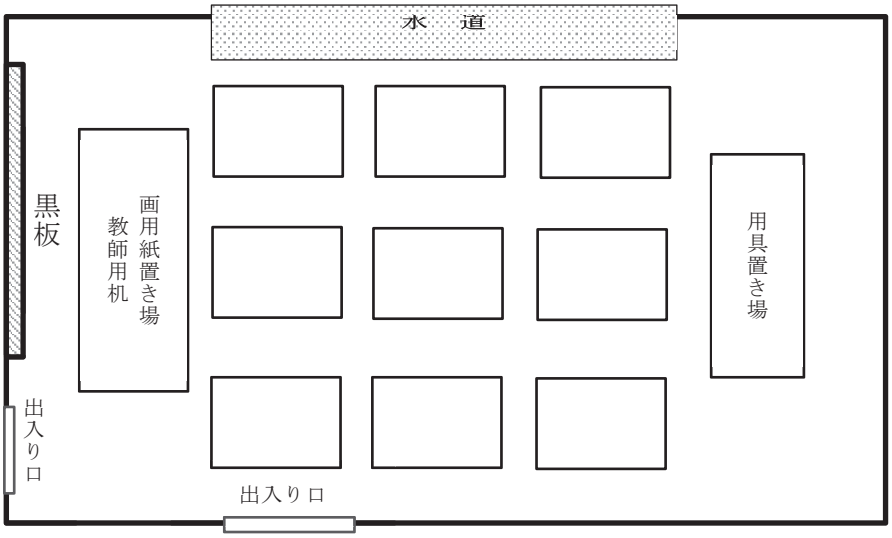
児童・・・絵の具セット、クレパス、色鉛筆、筆箱、リコーダー

授業者・・32 切画用紙（試し用）、四切画用紙、クレパス、色鉛筆、絵の具、カラーペン、チョーク、コンテ、刷毛、わりばし、ストロー、歯ブラシ、ぼかし網、ビー玉、スポンジ、お盆、タブレット PC（提示用）

楽器（カスタネット、タンブリン、鈴、トライアングル、マラカスなど）

環境・・①図工室に用具置き場を用意し、既習の用具を常に試すことができるようにしておく。

②絵の具の技法や用具の扱い方などの掲示を黒板に掲示しておく。



④　ワークシート

【鑑賞カード】

音を感じて表そう　鑑賞カード　**5年　組　名前**

1．友達の作品について（班＆全体）

作者	コメント（作品のよさや面白いところなど感じたこと）

2．学習の振り返り（自分が工夫したことや全体を通しての感想など）

○授業の様子

【楽器の音によって表し方を工夫していた】

【絵と楽器の音を比べながら発表した】

(6) 指導計画（４時間扱い）めあて…□、研究の視点との関連…

次	時	○主な学習内容 ・児童の活動	◆指導上の留意点 ◇教師の支援	学習活動に即した【評価規準】（評価方法）
第1次	1	いろいろな音を聞いて形や色で表そう ○いろいろな楽器などの音を確かめながら表したい音を選び、表し方を工夫して紙に表す。 ・題材名とめあてを確認する。 ・音を形や色で表すことを知り、既習事項の確認をして表現方法を振り返る。 ・実際に楽器の音を鳴らして音の感じ方やイメージをもつ。 ・教師の出した簡単な音を一緒に表す体験から、活動の見通しをもつ。 ① 楽器や物から出る音を確かめながら、表し方を工夫して表す。 ② 鑑賞会では、作品を基に演奏して鑑賞することを確認する。	◆音をテーマに紙に表す活動をすることを知らせる。 ◆簡単な音の例を示し、身近な音や音のイメージについて考えさせる。 ◆参考作品を見せ、音の例をいくつか出し、イメージをふくらませ、小さな紙に一緒に表して見せる。 ◇活動に時間がかかる児童やイメージがわかない児童に参考作品を見せたり、音の例を出して技法や用具の表し方の例を見せたりして選択しやすいように助言する。 ◇どのような技法があるか黒板に資料を掲示しておき、活動が停滞した児童には確認させる。 ◆いろいろな音を班の友達と確認し合ったり、鳴らし方を工夫したりできる時間を設定する。 ◆表し方や用具の効果を試すことができる小さな紙を用意し、使用してよいことを伝える。	【ア-①】（観察・作品） 【イ-①】（観察、作品）
	2（2・3）（本時）	自分で表したい音を工夫して形や色の楽譜のように表そう ○いろいろな音を鳴らし確認し、自分で表したい音を決めて四つ切画用紙に色と形の楽譜のように表す。 ・いろいろな音を鳴らし、確かめながら画用紙に表す。 ・描画材や既習の用具を組み合わせて音のイメージを画用紙に表す。	◆既習の表し方を確認させる。 ◆用具は用具置き場に並べ、既習の用具を選択できるようにしておく。 （刷毛、ぼかし網、わりばし、歯ブラシ、ストロー、スポンジなど） ◇表現が停滞する児童には用具の組合せについて一緒に試しをしたり、色の効果による感じ方の違いについて考えさせたりするなどの助言をする。	【ア-②】（観察） 【ウ-①】（観察、作品）

第2次	3	友達の作品と演奏を鑑賞してよさや面白さを見付けよう ○友達の演奏と作品を鑑賞してよさや面白さを鑑賞カードにまとめる。 友達の演奏や作品を鑑賞し鑑賞カードに気付いたことや感じたことを書く。 ・班の中で鑑賞し合い、数名は学級全体へ発表する。 ・最後に数名が、鑑賞カードのコメントと全体を通しての感想や振り返りを発表する。	◆友達の演奏や表した作品からよさや面白さなど感じたことを鑑賞カードに書くことを伝える。 ◆３，４名の班での鑑賞の交流と、数名が全体での鑑賞をすることを伝える。 ◇鑑賞カードに感じたことをなかなか書けない児童には、似ている音や同じ音を選んだ児童でも、表現方法が違うことや、同じ用具を使っていても表現方法が違うことなどを助言する。 ◆振り返りの時には、友達の作品や演奏からどんな面白さやよさを感じたのか取り上げ、全体へ広める。 ◆形がないものを表し、伝えることができたことや、自然音、生活音もイメージとして表すことができるのではないかなど感想の中から出た時は押さえておく。感想が出なかった場合は全体への発問として気付かせる	【エ-①】 （観察、鑑賞カード）

○板書計画

11/8（火）「**音を感じて表そう**」

めあて 自分で表したい音を工夫して
形や色の楽譜のように表そう

※紹介した児童の言葉から特徴を書く（はけ）
例：長い音→長い線　大きい音→太い刷毛で
　　高い音→薄い色

かたづけ
２：５５

片付け掃除分担表

活動の流れ

① 自分の表したい音を決める
≪音の特徴≫　音色　ひびき　重なり　強弱
　　長短　リズム　高低　など
② 音を「形や色の楽譜」で表す
　-用具と表し方を工夫する
③まとめ、片付け

（スクリーン）

技法の掲示物

※活動の様子や記録は適宜スクリーンで写す

【楽器を身近に置き、何度も確かめていた】

【既習の用具を選択】

7　成果と課題

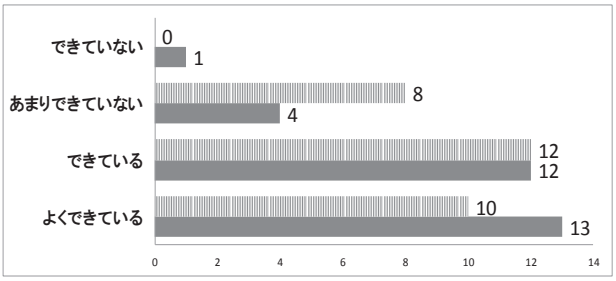
(1) 検証授業学習シートの結果比較（30 名）

以下の設問により授業を行う前と後で、どのような結果になったかを比較した。

【破線：授業前　棒線：授業後】

自ら価値を見いだすことが表現・鑑賞時にどの程度できているか

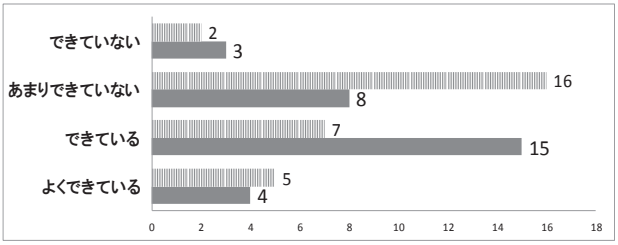
アー①　作品のアイデアを考えたりつくったり、活動している時「これだ！こうしよう！」と自分で決めたりして活動できていますか。



○たくさんアイデアが出せたから
○すぐに思いついて表せたから
○音で風景を想像し絵に表すことができた
●音の表し方があまり思い付かなかった
●表し方が難しかった

ほとんどの児童が表したいことを自ら決め、夢中になって活動をしていた。悩んでいる児童には、個別に声を掛けたり、班の友達の活動を見させたりすることで取り組むことができていた。

アー②　鑑賞会などで自分が感じたことをワークシートに書いたり発表したりできていますか。

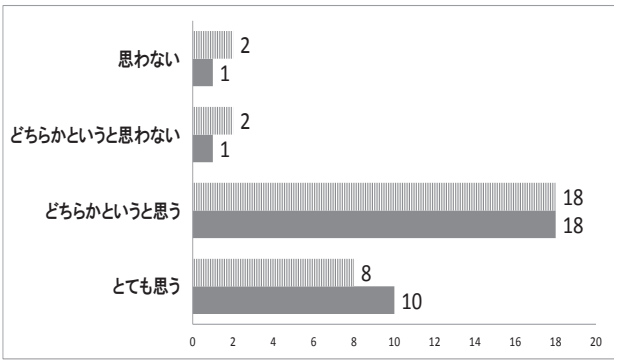


○発表できたから
○いろいろな人のアイデアがあったので書けた
●恥ずかしいから

授業後には、「あまりできていない」が減り、「できている」が大幅に増えた。児童が恥ずかしさを感じている場合には、個別の声掛けを行い、自信をもてるようにしていく。

日常生活との関わり

イ　生活の中で図工が関わっている（役に立っている）と思いますか。



○想像力がふくらむから。
○用具の使い方が分かるようになったから。
○物をつくるときに役立っているから。
●絵や工作が得意な人が役に立つから。
●苦手。あまり使わないから。

「思わない」「どちらかというと思わない」が減り、「とても思う」が増えた。一方で「あまり使わない」「絵や工作が得意な人が役に立つから」という児童もいる。生活の中でどのように生かされているのか、実感できる題材を今後も考える必要がある。

【主な変化】

ア、価値を見いだすことについて

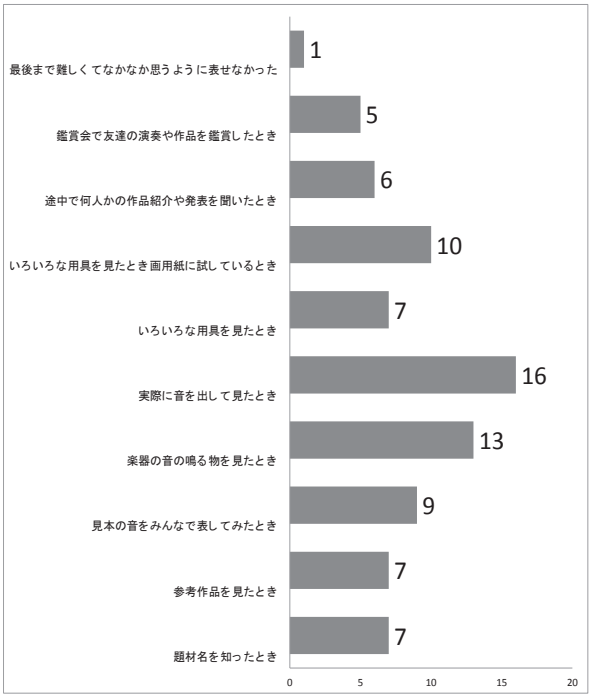
・表現活動時のアー①の結果から授業を行う前と後では、肯定的（できている　よくできている）と答えた児童は、22 人から 25 人に増加した。

・鑑賞活動時のアー②の結果から授業を行う前と後では、肯定的（できている　よくできている）と答えた児童は、12 人から 19 人に大幅に増加したが、苦手意識をもつ児童が解消されたわけではなく、鑑賞時の授業の工夫が必要である。

イ、生活と図画工作のつながりについて

・生活の中で図工が関わっている（役立っている）という項目について、肯定的（どちらかというと思う・とても思う）と答えた児童は授業を行う前と後では 26 人から 28 人増加し、9 割の児童が「関わっている・役立っている」と答えている。

ウ　今回の授業で作品のイメージが浮かんできたり、すすんで活動できたりするきっかけとなった場面は何ですか。（複数回答）



【児童の振り返りより】
・友達の作品を見て、いろいろな音を色に表していました。
・音をきれいに表していろんな色に分けてて楽しそうな感じにしました。
・友達の作品が分かりやすかったです。
・自分が考えていたことを色合いも工夫できてすてきな絵になりました。
・いろいろなアイデアがあるな、と思いました。
・人の演奏を聴くのが楽しかったです。
・難しかったけど、楽しい音を絵で表せました。
・自分でイメージするのが大変だったけど、絵でかくことが楽しかったです。
・それぞれがそれぞれの感じ方をもっていて、改めて個性を感じました。こんな表し方があるんだ！と思いました。
・他の音もやってみたいと思いました。
みんなと聞き合って楽しく図工ができ、明るい感じでできたのですごくよかったと思いました。
・一つの楽器でもいろいろな表し方があることが分かった。
・最初は想像できなかったけど、音を出したら浮かんできてできた。一人一人個性があっていいと思った。
・あまり体験できないことができてうれしい。みんなそれぞれ違う表し方で見ていて面白かった。

(2) 検証授業の成果と課題　　○成果　●課題

体や心で感じる場面の設定	○「楽器」という自分の力を使って音が出るものを扱ったため、自ら体験しながら音を感じられる題材としてよかった。 ○自分のペースで納得するまで音を味わうことができ、音の面白さを「体」で感じることができた。 ○音を表現する過程において何度も試しながら音を色や形にすることや友達同士で互いの作品について話す機会を設けることで、「心」でも感じる時間を確保でき、イメージが広がるよい手だてとなったのではないか。 ●表現に戸惑っていた児童への指導について、表現のヒントになるような具体的な手だてを更に検討することが必要であった。 ●授業中、楽器がずっと音が鳴っている状態だったため、静かに表す時間があってもよかった。
生活とのつながり	○音楽会の行事前で児童がいろいろな楽器を練習したり触れていたりしたこともあったため、児童の実態と合っていて、身近な楽器の音というテーマがよかった。 ○音という形のない抽象課題であったため、難しいという第一印象の児童も多かったが、手だてとして本物の楽器を用意したことや実際に音を出すことができるという場の設定からイメージが浮かび、表現につながったという回答も多かった。 ◇楽器を用いて様々な表現ができていたため、楽器以外にも、いろいろな音の出る物を使用する展開があってもよい。身の回りの音にさらに意識が向くようになる。今後、実践を検討する。
その他	○既習した描画方法や描画材、様々な用具を組み合わせ、イメージに合わせて表現することができていた。 ●抽象課題に苦手意識のある児童への対応は、今後の課題である。

Ⅶ　研究の成果と課題

１　中学校　　検証授業　第２学年「私が見つけた美しさ～屏風との出会い」
　　Ｂ鑑賞（１）ア　共通事項（１）ア　イ

「紅白梅図屏風」の実物大のレプリカ作品を教材として用いて、屏風本来がもつ空間のスケール感を味わいながらグループワークをすることで効果が期待できると仮定し、検証授業を行った。

事前と事後アンケートで変化が最も大きかったのは、「作品鑑賞などで自分の意見を発表（発言）したりできていますか」の質問に対する「できている」が 33 人中 9 人から 17 人、「あまりできていない」が 33 人中 15 人から 9 人の項目と「日常の生活と美術が関わっている（役に立っている）と思いますか」の質問に対する「とても思う」33 人中 3 人から 10 人の項目だった。

また、事後アンケートの「すすんで活動できたきっかけ」として顕著に多かった項目を順に並べると、下表の通りである。

①	実物大作品を見たとき	20 人
②	先生の説明や解説	18 人
③	グループで話し合っているとき	18 人
④	他の人の意見を聞いたとき	15 人
⑤	グループの発表を聞いているとき	13 人
⑥	作品を自由に見ているとき	12 人

（対象生徒数 33 人。複数回答可）

以上の結果を踏まえて、成果と課題について考察する。

研究に迫る手だてによって得られた成果と課題

(1) 成果

今回、「体で感じる場面を設定する」手だてとして、実物大のレプリカ作品を準備した。

実物大のレプリカを前にして、生徒は作品の前に座ってみたり、裏へ周ってみたり、それぞれがそれぞれの感じ方で作品を味わっていた。屏風の前に座った生徒に「どうして座ったの？」と話を聞くと、「殿様の気分を味わいたかった」という返答が返ってきた。これは屏風のある空間を体全体で味わっていることにつながる。決して教科書だけの鑑賞では味わえない感性の高まりを感じることができた。作品を鑑賞するにあたって、生徒は諸感覚を積極的に働かせているようで、その活動が興味・関心を引き立てることにつながっているということが①⑥の結果からも推察できる。

また、③④⑤より、「心で感じる場面を設定する」手だてとして、グループワークが有効に働いていることがわかる。現に、クラスメイトの自由な作品の見方・感じ方を通して、自らも自由に考え、表現することに目覚めている生徒や、グループワークで書き込んだシートが記録になり、作品とシートを見比べながら、自分の考えを整理していく生徒の様子を授業観察の中で見とることができた。このことは、事前と事後のアンケート結果の変化からも読み

とることができる。

「作品鑑賞などで自分の意見を発表（発言）することができていますか」の質問に対して、 ・「できている」　33 人中 9 人から 17 人 ・「あまりできていない」　33 人中 15 人から 9 人

次に、「題材と生活を関連付ける働き掛けをする」手だてとして、授業者が屏風で物を隠し、空間を仕切る効果に気付くような働き掛けを行ったり、カーテンやパーティションなど現代の生活の中にも空間を豊かに演出する方法があるということを解説したりすることで迫った。これについても、②のような結果がでており、効果が感じられた。事前アンケートでは全て「できない」と答えていて、普段はあまり鑑賞に興味をもてない生徒が、授業者の解説を聞いたあと、自ら手を挙げ、鎌倉のお寺で見た金屏風のことを雄弁に語り、発表する場面があった。まさに生活から得た実体験と鑑賞授業とが結び付いた瞬間である。先に述べた事前と事後のアンケート結果の変化を見ても、この生徒だけでなく、ほかにも美術作品と生活との間に共通するものを見いだせている生徒が多数いたことが分かる。

「日常の生活と美術が関わっている（役に立っている）と思いますか」の質問に対して、 ・「とても思う」　33 人中 3 人から 10 人

最後に「すすんで活動できたきっかけ」の中で生徒が自ら活動する項目だけでなく、「先生の説明や解説」の項目に印を付けた生徒が多かったことも注目したい。中学生においては、その発達段階として、知識的な欲求や好奇心の高まりから、そこに興味・関心が傾く時がある。体や心で感じる体験活動と、その知的欲求と知的好奇心とが満たされた時に感性は高まり、自らの中に価値観が芽生えてくるのではないかと生徒の実態から感じ取ることができた。

(2) 課題

課題としては、より効果的に教材を扱うために、作品や作者情報を提示するタイミングについて更に検討する必要がある。授業後に行われた協議の中でも、「鑑賞を深めるためには、事前にある程度提示しておいた方がよいのではないか」という意見と「先入観がないことで、自由に発想を展開できる」という意見とに分かれた。いずれにせよ鑑賞授業を行うにあたって、作品との出会わせ方については、考え工夫していく必要がある。

また、一斉に鑑賞をすると、屏風の前に人だかりができ、時間内で思うような鑑賞ができなかったり、作品に興味をもてなかったりする場合もあった。鑑賞方法や時間の確保、見やすさの保証など、どのような工夫ができるのかは考えていかなければならない。

２　小学校　　検証授業　第５学年「音を感じて表そう」Ａ表現（２）　Ｂ鑑賞（１）

研究に迫る手だてによって得られた成果と課題

(1) 成果

様々な種類の楽器の音を鳴らし、聞き、それを色とかたちで表す内容の授業に子供たちは音楽会を間近に控え、高い興味・関心を示し活動していた。始めのうちは楽器を何度も鳴らして自分で音を確認したり、友達同士で音を聞き合ったりする時間が続いた。描画材を選んで自分が聞いている音をどのような色とかたちで表すのか思考を巡らせている様子が見られ

た。また、楽器が手に届く位置にあり、鳴らしては表し、表してはまた鳴らす姿から、外界からの刺激を受け止める感覚的な能力（感性）を働かせている様子も見受けられた。

「今回の授業で作品のイメージが浮かんできたり、すすんで活動できたりするきっかけとなった場面は何ですか（複数回答）」

・「実際に音を出したとき」　30 人中 16 人
・「楽器や音のなるものを見たとき」　30 人中 13 人
・「いろいろな用具を見たとき、画用紙に試しているとき」30 人中 10 人

上記は楽器を鳴らすことと表すことを繰り返すこと、つまり手だての「手や体などの諸感覚を働かせる題材設定の工夫」、「自分の思い、気付きから始まる題材設定の工夫」を行うことが児童の実態「表したいことを見付けて絵に表わすことに課題がある」ことに対して有効な手だてであったことが考察できる。子供たちは発想のきっかけを、楽器を耳で聞くこと、いろいろな楽器を見ること、様々な用具を使い身体性を働かせることなど諸感覚を働かせてイメージを広げていたことが事後アンケートから分かる。

「鑑賞会などで自分が感じた事をワークシートに書いたり発表したりできていますか」

・「あまりできていない」　30 人中 16 人から 8 人
・「できている」　30 人中 7 人から 15 人

また、事前と事後アンケートで変化が最も大きかったのは鑑賞時の項目だった。鑑賞の活動においても表現と同様に言語活動を行うだけでなく体や心で感じる場面を設定し、自分の描いた音がどんな音なのか作品と合わせて演奏を行った。活動の振り返りで、「人の演奏を聴くのが楽しかった」「それぞれがそれぞれの感じ方を持っていて、改めて個性を感じました。こんな表し方があるんだ！と思うこともありました」「みんなと聞き合って図工が楽しくて明るい感じでできたのですごく良かったと思いました」などの感想があった。

表現や鑑賞の活動に研究の手だてを設定することで、鑑賞の効果が高まっている様子や、一つ一つの音の強弱、響き、重なりなどに自分なりの意味を見付けようと積極的に取り組んでいる様子が見られた。

肯定的回答「できている」、「よくできている」と回答した子供の人数

・表現活動時・・・22 人から 25 人へ増加
・鑑賞活動時・・・12 人から 19 人へ増加

以上の事から、感性を働かせる手だてを講じることによってイメージが広がり、表現と鑑賞の活動が充実し、自分なりの見方・感じ方で生き生きと自ら価値を見いだす子供たちの姿を見ることができた。

(2) 課題

課題として、大きく次の２点が挙げられた。第一に、苦手意識のある児童への対応についてである。苦手意識をもった児童は非常に少人数であり、事後アンケートではそれぞれ事前

と比べ少しずつ肯定的回答が増えていたが、「音を描くのが難しかった」「鑑賞時の発表が恥ずかしい」などの意見があり、個別に対応するなど方策をとる必要があることが挙げられた。第二に、生活と関連付ける働きかけに工夫の余地があったことである。この点について、児童のアンケートからは肯定的な意見が30人中26人から28人と非常に高い数値を示しているため、一定の成果が得られたのも確かであるが、協議会において、楽器だけでなく日々の生活の中の音などを活用してはどうかという意見が挙がった。今後子供にとって、より身近で生活と関連付きやすい興味関心を探り、感性を高める手だてとして授業に取り入れていきたい。

3　まとめ

研究を進めるにあたって「なぜこの研究が必要なのか」ということを、現在の教育を取り巻く状況を資料などから分析し現状把握していった。題材を考える際、「面白そうだから」「子供たちが楽しんで取り組みそうだから」ではなく、「児童・生徒の実態を受け、どのような力を身に付けさせたいのか」を明確にした上で魅力ある題材を考えることの大切さを学んだ。そのためにも、社会や国、都の動きから所属地区の様子や目の前にいる子供たちの姿まで、大局的な見地に立ちながら、局所にも話を進め、実態から改善すべき内容を明らかにした。また、小学校図画工作科・中学校美術科の合同部会として、校種の違いや発達段階の違いを越えて共通に働くテーマは何なのかについて話合いを重ねた。

その中で小学校・中学校・高校と全ての校種の教科の目標に入っている「感性」に焦点をあてた。児童・生徒の実態を考えると「自ら価値を見いだす姿」に迫れる授業であれば、現在の課題となる多くのことを改善できるのではないかと考え、そのためにも感性を高めること、さらには生活の中とのつながりを意識することに重きを置いて取り組んだ。

検証授業では事前と事後にアンケートを行い、変容を考察した。その結果、感性を働かせることで表現と鑑賞の項目が改善されていることが明らかになった。特に小学校・中学校ともに、鑑賞の項目について大きな変化が見られた。感性を働かせる手だてを講じることにより、子供たちの心で深く感じ取る感覚的能力が高まり、授業の中で多くの気付きや発見があったのではないかと考える。そうして感受した様々な事柄を他者に伝えたいという思いが膨らみ、経験したことを話したり、書いたりして伝えることへの意欲につながったのではないか。小学校の低・中学年の授業の中では、「先生、見て、見て」と自分の発見した価値について喜々として伝えようとする子供の姿が多く見られ、年齢が高くなると夢中になって自らの表現や作品に向き合ったり、互いの作品について感想を伝え合ったりする姿が多く見られた。このようなことから、感性を高めることで個々の気付きが増え、感じたことや考えたことについて自信をもって表現したり、発表したりする児童・生徒の姿に迫れたと考える。

今後も、このような姿が授業の中で多く見られるように、子供が感じて表すことを大切にし、自分なりのよさや美しさを見つけ価値を形成することを目指した研究を進めていきたい。

平成２８年度　教育研究員名簿

小・中学校　合同　・　図画工作・美術

学　校　名	職　名	氏　名
新宿区立淀橋第四小学校	主任教諭	峰 岸　　志 保
大田区立東調布第三小学校	主任教諭	柴 田　　園 子
練馬区立開進第三中学校	主任教諭	○高 野　　朱 未
荒川区立赤土小学校	主任教諭	◎後 藤　真理子
府中市立府中第五小学校	主任教諭	小 泉　ちぐさ
府中市立府中第五中学校	主幹教諭	小 林　　功 治
福生市立福生第六小学校	主任教諭	篠 原　　真 帆
国分寺市立第四小学校	主任教諭	栗 本　　圭

◎世話人　　○副世話人

［担当］　東京都教職員センター　研修部　教育開発課
指導主事　　菅野　恭子

平成２８年度

教育研究員研究報告書

小・中学校　合同・図画工作・美術

東京都教育委員会印刷物登録

（平成２８年度第１４２号

平成２９年３月）

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所　在　地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０−６８４９
印刷会社　株式会社オゾニックス

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。